郷土の文化財 1

馬瀬口下原古墳群

御代田町馬瀬口下原古墳群学術発掘調査報告書

1975.11

長野県北佐久郡
御代田町教育委員会

北佐久郡御代田町下原古墳群、昭和４年八幡一郎氏により調査され、現今１基のみ残る。昭和49年度清掃調査され保存された。

序

佐久平には豊富な古墳や古代遺跡が分布し、御代田付近はその東北端にあたり、古代人の生活について貴重な資料を提供しています。
その保護対策に近年開発の嵐が容赦なく吹き荒さぶなかで、残されたこれら重要な遺産を、後世に伝え、また保護していかなければならない責務を痛感いたしております。

馬瀬口下原古墳群は、幸にもブルの鉄爪の中に、影を失うことなく、佐久平でも極めて稀な学術発掘調査をし、保存、保護を為し得ました。

早春の五月より、保存工事をなした三月まで、長期間に亘り、終始調査団長として、密度の高いエネルギッシュな調査をいただいた、県文化財保護指導委員の与良清先生（小諸市誌編纂主任、町郷土史研究会顧問、副団長をお引受けくださった、野沢北高校教諭藤沢平治先生（県考古学会委員）、県考古学会員、信州大学学生、明治大学学生、佐久考古学会員、町郷土史研究会員、小沼村誌編纂会員の諸先生方の参加を得ることができました。

調査の結果、副葬品はほとんど盗掘を受けていましたが、天井石等の横穴式主体部が完存しており、地主山本万喜夫、山本享両氏の格別の御協力をいただき、多くの成果を収め得ましたことは、種々の悪条件の中で、学問の探究心なくしては、この金字塔はうちたてられるものではありません。
古墳は墳丘に盛土し、保護棚をなし、永久保存され、本書と併せて、御代田町の古代史究明のため活用されることを期待します。

おわりに、調査特に人骨については信大の西沢寿考先生に、石質について小諸火山博物館長、白倉盛男先生、遠路指導にお出いただいた県教委指導主事丸山敬一郎先生、直接調査にたずさわって下さいました各位に深甚の敬意を捧げるものであります。

昭和50年11月1日　　文化財保護強調週間の始まる日

御代田町教育長　桜井　茂

主任（担当者）	日本考古学協会員		島川長久
調査委員	町文化財審議委員長	町郷土史研究会長	山本太郎
〃	〃　副委員長	〃　副会長	大井豊
〃	町文化財審議委員	〃　〃	尾台卓一
〃	〃		神津玄嶺
〃	〃		内山俊雄
〃	〃		堀篭源
〃	〃		原田道夫
〃	〃		故土屋義包
〃	〃		故内堀通夫
調査員	県考古学会員	佐久考古学会員	武藤金
〃	〃	〃	井上行雄
〃	〃	〃	三石延雄
〃	〃	〃	佐藤敏
〃	〃	〃	森泉定勝
〃	〃	〃	木内捷
〃	〃	〃	青木幸男
〃	〃	信州大学繊維学部学生	高村博文
〃	〃	信州大学教育学部学生	臼田武正
〃	〃	明治大学文学部学生	花岡弘
調査協力	小沼村誌編纂会員（会長　内堀郡次）		
事務局	御代田町教育委員会	教育長	桜井茂
	〃	学校社会教育課長	木内三四郎
	〃	社会教育主事	島川長久（旧姓土屋）

2、調査日誌

4月30日　午後1時30分より、御代田町役場において下原古墳学術調査に伴う審議会が開かれ、以下協議される。

1)調査はあくまでも古墳保存を目的として作業を行い、両壁側の露出にとどめ、主体部の清掃に重点をおく。

2)調査は、文化財審議会が、委員会を構成するが、現地の調査には、団長与良清先生を始めとする調査員の諸先生に委嘱する。

3)発掘調査は5月15日～17日とし、冬をこして3月20～31日に保護柵工事を行う。

4)古墳保存整備工事については、古墳を地主より借地する。古墳の周辺に保護柵と案内板、案内

標住を立てる。

5)調査及保存工事の終了した後に、町内外の古墳と比較調査し、町指定保護文化財にするか検討したい。

6)本墳は昭和4年八幡一郎氏が調査し、後日大場磐雄氏から積石塚と扱われているので、その古墳技術について再調査を行う。

5月15日(土)快晴

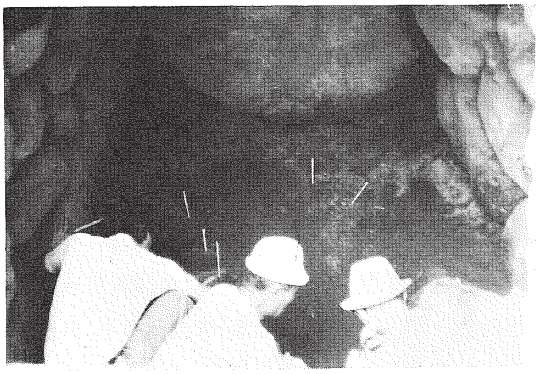
下原古墳の現状及周辺の測量を、島川、青木、高村で行う。

5月16日(日)　快晴

器材の搬入及び、古墳主体部の埋没している土砂及び礫をとりのぞく。地主山本万喜夫氏のお話によれば、本墳は戦前、開口しており子供達の遊び場となっていたが、危険性があり、墳丘の土で埋めたと云う。天井石及び、両側壁、羨道部壁の上部はすでに露出しているので、主体部内のとりのぞき作業にかかる。縄文式(中期)土器片、石斧、須恵器片が交り、いずれも礫は多い。主体部中央部よりかまち石らしきものが検出されたのでこの面でとめ、床の追求にかかった。またこの日、土砂礫は、4トンダンプで4台分を計った。

5月17日(月)　快晴

先日検出された、まぐさ石はかなり大型となり、本墳のかまち石と確認された。天井石上部より地下 0.7 m の地点に至り、礫床の1部が検出されると共に、その面を追求して、玄室一面の清掃にかかった。その上部から一面にわたり人骨片が検出され始め、主要人骨の分布及出土状況を記録にとどめると共に、人骨の鑑定調査をなした後に再び、精査する事として、清掃調査を目的とした発堀調査は本日で終了した。



第2図　玄室内調査状況

5月22日　　快晴

県教育委員会文化課による、美術工芸品第2次調査として、県文化財専門委員、米山一政先生、県教委文化課事務局主事、堀内氏等来町する。特に下原古墳の保存につき、視察され、種々指導を受ける。

6月13日～15日

関越道上越線工事内埋蔵文化財分布調査として、県教委文化課指導主事丸山敏一郎氏、調査員、

高村博文、臼田武正氏等、町内分布調査を行う。特に開発地域の広域農道内工事予定ルートも調査を行った。

3月21日(金)　快晴

下原古墳、保護柵工事に伴い、石室内清掃及羨道部の清掃を行う。人骨2体分と共に歯が多く検出される。いづれも玄室礫床上であった。

3月22日(土)　快晴

本日は羨道部を主に清掃を行ったが塞閉石もなく、羨道からは工具(切羽)、直刀片、鏃片が散在していたほか、玄室内の土を、水で洗ったところ、金環、臼玉、ガラス玉等が検出され、主なる副葬品は発見できなく、本墳はすでに開口していた古墳と解された。

午後3時より、地主、山本万喜夫、山本享両氏が施主となり、調査団において、飯玉神社弥宣　猿田昭五氏が斎主となり、同古墳に埋葬された、“みたままつり„がとり行われた。

4月13日(日)　快晴

下原古墳の石室主体部の実測作業を行う。武藤、高村、青木、島川調査員参加し、本墳石室構造について分折を行う。

4月14日(月)　快晴

午後3時より、下原古墳の慰霊祭が行われた。斎主は御代田町宝珠院住職大沢俊雄氏により、同古墳にまつられた当時の小沼郷の首長の豪族の“みたままつり„がおごそかにとり行われた。

また町は同古墳保存の為、地主山本万喜夫、山本享両氏とに、土地債賃契約を行った。(御代田町文化財審議会)

第3図　奥壁(上)、調査団(下)

第2章　下原古墳群

1、下原古墳群と周辺遺跡

御代田町は、長野県北佐久郡の北東部に位置し、北は浅間山(標高 2,542 m)頂上で群馬県吾妻郡に接し、南は小田井地籍で佐久市に接している。東は軽井沢、西は小諸市に接する浅間山麓で、地勢は東西に傾斜し、その東南端に森泉山(標高 1,135 m)、平尾山(標高 1,155 m)の山嶺がありその間に千曲川支流の湯川、濁川、繰谷川の諸河川があり、いづれも浅間山麓より湧出し、縦に長くいくつもの火山洪積台地が形成され、総面積の66.1%は山林、原野でしめられ、町の中央を東西に信越線が走る。

町は明治8年5月、村が合併し新称「御代田」と称したことからで、御代田(みよた)という名前は維新の御代を慶祝する意味での「御代」に各村々にある「田」という文字をとって合成された。その後、小沼村、伍賀村の合併で、昭和31年9月御代田町となった。

御代田付近の名が、古文献に初めて現われるのは、「和名類聚鈔」「延喜格式」で、小沼、長倉牧、塩野牧の名称で記載されている。また上代の立科町雨境峠からの東山道(あづまやまみち)、律令制の官道である。東山道の通過地籍にも位置し、開発は古いといえる。近年、東山道長倉郷、長倉の駅家址を小田井付近に比定する論考もみられ、(菊地清人「古代における佐久郡の道と駅ー東山道長倉駅跡考ー」『研究の記録』第2集、南佐久教育会。一志茂樹「古代碓氷坂考」『信濃』1010) 今後の古墳群等の発堀調査で実証されてゆくものと考えられる。(一志茂樹「御代田村の古史を深る」御代田村誌編纂会)

御代田町における考古学的調査は古く、明治14年の長野県市町村志に、宮平遺跡の記載があり、茂沢付近の遺跡地名表は、『人類学雑誌』(神津猛、清野謙次、江見忠江、「石器時代古墳時代遺物発見地名表」『人類学雑誌』19の28) で広く紹介され、とくに宮平遺跡は明治37年以降、佐々木朝次郎、大井宅蔵、M・G・マンロー、八幡一郎氏により調査され、与良清氏の『北佐久郡志』、八幡一郎氏の『北佐久郡の考古学的調査』(昭和9年、北佐久教育会発行)に、若干の考察が試みられているが、遺跡の全容は把握されていない。八幡一郎氏の一連の調査で、昭和4年、馬瀬口下原古墳群の発堀調査も行われた。しかし本格的な調査は、昭和27年6月から昭和30年の夏にかけて行われた信濃史料刊行会『信濃史料』1巻(信濃考古綜覧)の大場磐雄博士(国学院大学教授)、永峰光一 (国学院大学講師)、樋口昇一(信州大学講師)、与良清(東信史学会副会長)らの分布調査であろう。

これらの調査以前、旧伍賀村地籍のうち、軽井沢町へ併合した茂沢地区、茂沢南石堂遺跡は昭和36年5月～昭和41年5月まで、八幡一郎、三上次男氏等で調査され、(三上次男・上野佳也「 長野県軽井沢町茂沢南石堂遺跡」『軽井沢町文化財調査報告』昭和43年)、旧御代田村地籍では佐久市へ併合した小田井下宿、西屋敷地籍のうち、皎月原の通称、胴塚が昭和45年3月、大川清博士 (国土館大

学教授）により調査、西屋敷部落の大字小田井字後原地籍に所在した下前田原古墳群が、昭和47年８月～９月にかけ、島川長久(御代田町教育委員会、社会教育主事)により調査され、御代田付近の、原始～先史時代の歴史の１部が解明された。

信濃史料１巻では、旧伍賀村、御代田村・小沼村内として、埋蔵文化財所在地として15箇所の所載をみ、その後の昭和35年～37年にかけ、国の文化財保護委員会が実施した、埋蔵文化財包蔵地の分布調査では13箇所の遺跡の記載がみられている。これ等は御代田分布図及び遺跡一覧表の(1)～(11)までである。（町遺跡分布図略、町の北部を第８図とした）

今年度の調査は上記した文献を基礎として、さらに未調査の地域を中心に踏査した。この結果、この調査によって前記県教委台帳所載の遺跡のほかに、御代田町内では分布図及び遺跡一覧表の(12)～(42)の31遺跡を新しく追加した。このうち(1)・(3)・(4)・(8)・(9)・(10)・(15)・(17)・(18)・(21)・(22)の11遺跡は前記八幡一郎氏の遺跡地名表にみられるものの、出土遺品については、今日まで現存保管されている所蔵者は、宮平遺跡の大井源寿氏をのぞいて不詳が多い。新しい遺跡はいづれも小字名に従って遺跡名を修正した。

遺跡番号 図版	遺跡番号 県登録	種類	遺跡名	所在地	立地	地目	時期	遺跡の状況及び出土品	備考
1	701 702	古墳	下原古墳群	馬瀬口下原784他	段丘	畑	古	2基，円墳(横)	
2	703～705	〃	めがね塚古墳	〃 戻場895他	台地	〃	〃	3基，円墳	
3		包蔵地	馬場	塩野馬場	〃	畑校地	平	土師器，須恵器	
4	698	古墳	細田塚古墳	〃 細田2738	〃	山林	古	円墳（径 7.0ｍ 高 1.5ｍ）	
5		包蔵地	湧玉	〃 湧玉1125他	山麓	畑水田	縄	縄文(中)打石斧 石皿	
6		〃	二ツ石	〃 二ツ石	台地	畑	〃	縄文(中)	
7		集落址	上藤塚	〃 上藤塚758他	〃	山林畑	〃	縄文(中・後)打石斧 石皿	
8		包蔵地	狸窪	〃 狸窪	〃	畑	〃	縄文(中)	
9		〃	駒込	〃 駒込340	〃	〃	〃	縄文(中)	
10	697	〃	広畑	〃 広畑	〃	〃	縄・平	縄文(中)打石斧 土師器 須恵器	
11		集落址	細尾根	〃 細尾根	〃	〃	〃	縄文(中)土師器	
12	695	〃	城の腰	〃 城の腰	〃	〃	弥・古	弥生(後)土師器	
13	694	包蔵地	滝沢	〃 滝沢関屋他	〃	畑水田	縄・平	縄文(前・中・後) 石鏃，打石斧，磨石斧，石匕，石皿，須恵器	
14		〃	大沼	〃 大沼147	〃	畑	平	土師器	
15	696	〃	西城東	〃 西城	〃	〃	縄	縄文(中・後)	
16		〃	西城西	〃 〃	〃	〃	〃	縄文(中・後)	
17		〃	東荒神	〃 東荒神	〃	〃	縄・平	縄文(中・後) 土師器	
18		〃	西荒神	〃 西荒神	〃	畑水田	縄	縄文(中・後) 打石斧	

下原地籍には昭和５年に調査(八幡一郎；当時の東大講師)をみた古墳群五基があり、国道18号線の新設により、３基が消滅し、今日２基のみが現存している。（県遺跡台帳701～702)、八幡一郎先生によって、石が多く墳丘にあり、一時は帰化人の墓と称される積石塚形式の古墳ではあるまいかと称され、佐久地方、牧場、帰化人の古代史上大切な古墳とされていた。

「旧南大井村、馬瀬口の下の原の畑中には５基の墳墓を現存し、内２基（下の原第５号墳、第２号墳）は昭和に入って発掘し尽され、僅かに石室壁の残株を止めるに過ぎないが、他の３個は墳丘を遺存する。後者は、台地縁に沿うて略東西に一直線に並び、前者はそれより一段浅い所に東西方向に並ぶ。後者の墳丘は、傾斜地に存する故か土砂が流逸し、それに混った礫石が遺っているのみである。３基の内東側のもの(同４号墳)は過去に於て発掘せられ、中央のもの(同３号墳)は昭和４年吾々の手で発掘し、西側のもの(同２号墳)は未発掘である。下原第３号墳は全掘するには至らなかったが、奥壁に近い側壁から、玄室内に掘り進んだところ、室内には礫石を混ずる土砂が充満していた。これは恐らく封土が石室内の壁の間隙から流入したであろう。これを除々に除く内に馬、犬の骨及び、皇宋通宝、紹霊元宝等が出た。これ等は室の底面から遙かに上位の土砂中に存したものであるから、此の墳墓と直接関係のあるものではなく、後世に入ったものと解される。

従って後世の或時期に石室の一部が開口していたと見なされる。

さらに、掘り下げて底面に達する頃、二体の人骨を発見した。共に頭部を奥壁に近く置き、一は室の中央に、他はその右側に並び横たわっていた。人骨は腐蝕甚だしく、副葬品の類も認められなかった。

僅かに中央の人骨の頭附近に鉄片を認めた。

以上の結果から後世一度盗掘に遭ったものと認めて、羨道部に及ぶことなく、発掘を中止したのであるが、中軸線は略東北位に示し、南方に開口する石室と判断した。」

八幡一郎「原史時代遺跡」『北佐久郡の考古学的研究』より

192～173 P　昭和９年

本古墳群と近いものとしてめがね塚、あるいは旧御代田村小田井西屋敷の下前田原古墳群がみられ、そのうち、下前田原古墳群のうち、後原・１・２号墳、皎月原の胴塚等が調査され、とくに後原１・２号墳からの石室主体部のうち２号墳から、副葬品の伴なわない人骨が９個体以上が検出され、下原３号墳とやゝ似た状況を示していた。１号墳丘から馬の骨も検出され両墳共に、後世うめもどされ、何等かに使用せられた生活面が見られ注目される。

２、古　　墳

1)地形（第７図）

下原古墳は大字馬瀬口字下原789の2、784番地に位置する。この古墳の調査経過については前述したが、５基からなる群集墳であり、昭和４年当時八幡一郎氏により、調査をみたものの、地元では多くの遺品出土の伝承をのこしているが、その副葬品については不詳である。

他の古墳群では字戻場所在の、めがね塚古墳の東側の古墳を農地改良の為、消平した折、直刀、

須恵器甕、等が出土し、現在小諸市長龍寺住職永原秀山氏のもとに保存されている。

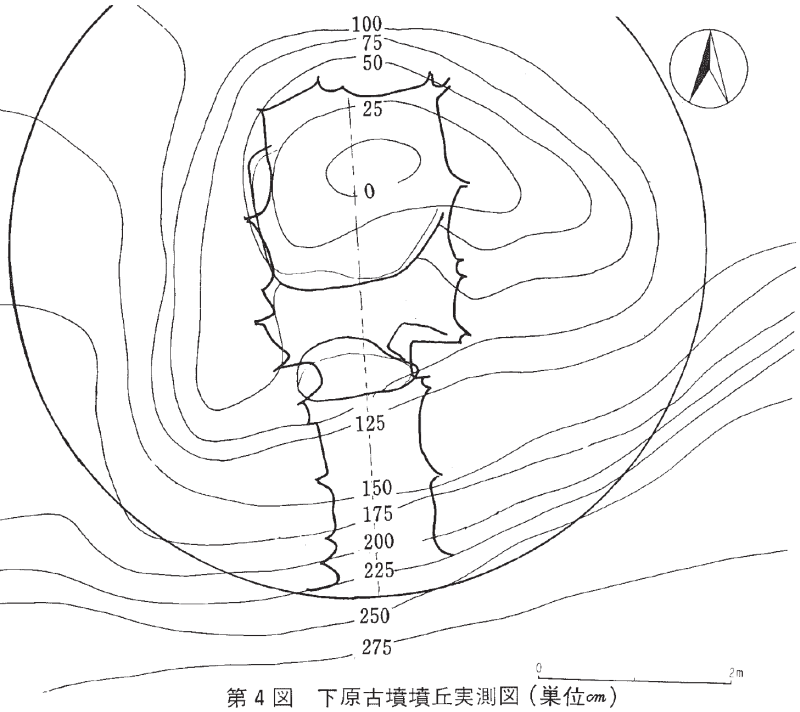
さて、下原古墳群の築かれている地籍は、田切り地形上にあたり、丘陵の南側は、水の伝承による赤沼という沼があったと云われている。

古墳の分布は、佐久市西屋敷の下前田原古墳群からほゞ南北に田切り地形上に位置しているのが注目され、あたかも、聖なる墳墓地域を示している分布状況にある。古墳の所在する畑地は平地であるが、十石峠からして、古墳群は平地でなく、田切りの南傾斜地に営なまれた事が推定される。

2)墳丘（第4図）

調査前の墳丘の規模は東西 6.2m、南北 6.5mで、すでに南側は石垣（墳丘に用いられたであろう礫を主に）で、段丘となっており、墳丘のそのほとんどは消平され、耕地化している。

墳頂には天井石（2.0×1.5m、厚さ0.7m）の一枚石が残り、昭和47年頃まで樹木も繁り、畑のかたすみながらも、地主山本万喜夫氏により除草され、古墳らしき姿を留めていた。



第4図　下原古墳墳丘実測図（巣位cm）

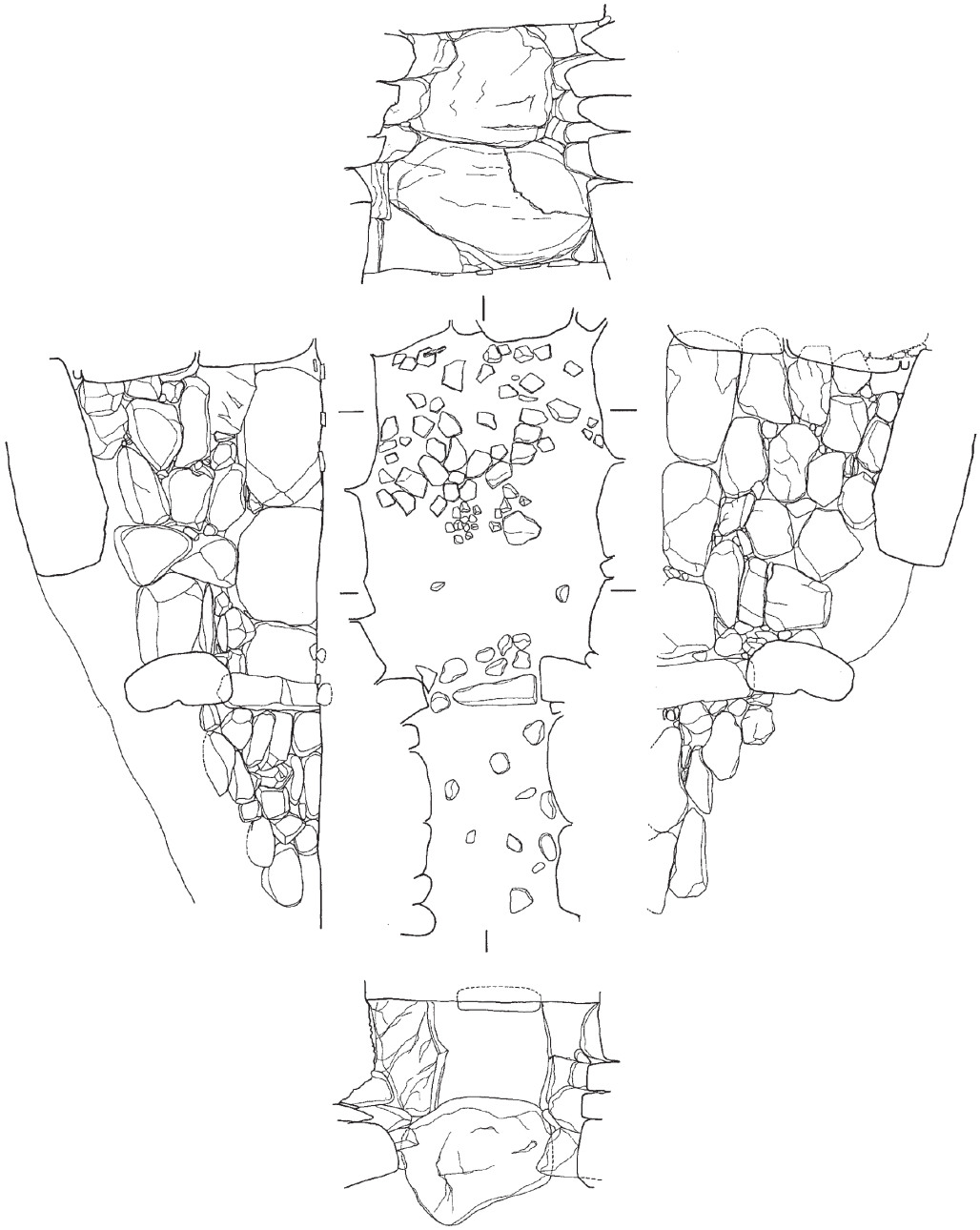
発掘作業は、主体部の保存が主で、墳丘及び、周湟部分は、調査トレンチを入れず、又、前庭部にあたる位置は、すでに、下段の畑地の為、かなり消平されており、その初源的状況は確認できない状況にある。

玄室及び羨道の中軸より、この円墳の推定のコンパス線をひくと、およそ径13～15mの円墳であった事が推定され、これからにして、本墳の裏ごめ部分が残っていることが推定された。従って本墳での墳丘には軽石、浅間焼石が多く使用されていた。

3)内部構造（第5図）

天井石は、当初南側に傾斜しているかに目測されたが、両側壁共に完全に、まぐさ、かまち石も現存し、発見された事は佐久平東北部では石室構造を追求する基礎資料となる。

主体部は、両袖式プランを呈し、東側にわづか胴張りが認められるものの、長方形の玄室といえよう。長軸はN－18度－Eで、規模は全長5.65m、奥壁部で幅 3.6m、羨口部で幅 2.1mである。側壁については東西とも3.35mを計り、5段まで算えられている。岩石はいづれも、湯川の安山岩で、1辺1.45×1.25m前後の長方柱状のしっかりしたものである。



第5図　馬瀬口下原古墳石室実測図

奥壁は２枚の大石よりなり、壁上でわずか持ち送り技法が観察さるる。

棺床は１部分に礫床として敷石が残っているが、羨道部には検出されなかったものの、当初は敷石の床と推定される。

遺物はいづれも人骨にまじって、散在しており、初源的な位置を示しているものはない。したがって本墳の石室プランは、玄室が長方形をとる両袖式の典型的なものと解される。しかし５基存在した、下原古墳群の中にあっては、１番南側にあり、しかも低い地形に位置していることになり、八幡一郎氏の調査された古墳群のうちの１古墳と解される。

4)遺物及遺物の出土状態（第６図）

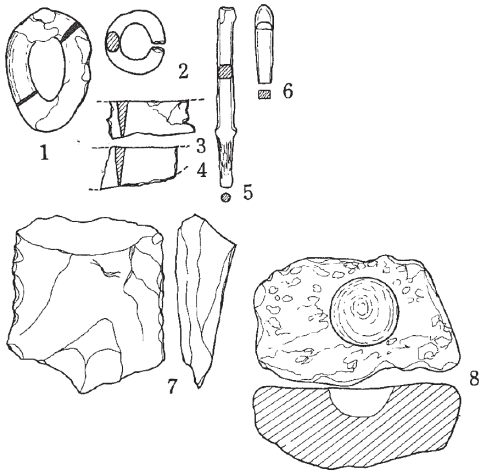
下原古墳の石室内に於ける遺物の出土状態はその出土は多くなく、人骨片が全面に散布していた他、土師器片、須恵器片が散布しており、完形品は全く検出されなかった。

遺物は直刀片(少量)刀工具(1)、金環(1)、刀子片(2)、ガラス玉(9)、臼玉(3)、鉄鏃片(11)、土師器片(5)、須恵器片(9)、その他墳丘の土に交ってであろう、縄文時代前期・中期土器片(各１)、同代打製石斧(1)、中世の軽石製品(1)が主なるものである。

切羽(第６図１)は3.4cm×4.9cm、厚さ0.2cmを計る鉄製のものである。

金環(第６図２)は径2.6cm×2.4cmを計るものである。３～４は、刀子の破片であるが器形を知ることはできない。５～６は、鉄鏃片中、器形を知ることのできるもので尖根鏃であろう。

切羽は羨道部より出土した他２～６は玄室内礫床上より、検出されている。



第６図　下原古墳出土遺物実測図(1：3)

5)小括

下原古墳で、まず問題となるのは、自然のマウンドに築かれていた本墳は、５基からなる下原古墳群のどの地点にあたり、形式編年上那辺に位置するかという点と、副葬品がほとんど少く、須恵器片からして終末期の八世紀と解して良いのではあるまいか。

尚、本章は、調査員一同話し合いをなし、学習討議をして共同執筆とした。

第７図　下原古墳群の地形(１：12000)
1.下原古墳群、2.めがね塚古墳群

第８図　御代田町遺跡分布図（県関越道上越線工事内埋蔵文化財分布調査報告書より

第3章　下原古墳出土人骨について

玄室内における遺存人骨および歯牙は、ほとんどが細片化し、散乱して出土したため、それぞれの個体識別、埋葬状態等の確認は不明である。特に全骨格中、諸種の特質を有する頭蓋骨は、残された脳頭蓋部分のほとんどが、ほぼ2㎝平方の骨片となり、歯の出土状態と共に判別し難い。

主な形質を残す骨の部分について簡単に記すと次の通りである。

人骨は全体的に黄褐色の色調を呈し、表面は滑澤であり、腐蝕されてはいるが、緻密質部などは堅緻に保存されている。四肢骨の一部に風化による外層板の制落がみられる。

頭蓋骨は頭頂骨の中央部と、各縫合を介して隣接する前頭骨、後頭骨がわずかに接合して残る。側頭骨は左右の外耳孔を含む錐体積の部分のみであり、乳様突起は欠く。後頭骨は人字縫合の縁辺が離脱しており、後頭隆起の部分が細片として残る。

他に脳頭蓋が細かく破砕されているが、これらがすべて同一卵体であるか否かは同定し難い。上下頭骨はまったく遺存しない。頭蓋冠部における各縫合の癒着程度をみると、冠状縫合、矢状縫合、入字縫合の各縫合とも、内外板共に消失は認められない。これらはBrocaの分類による0°をしめす。ただし各縫合のなかで、もっとも早く癒着の現われる矢状縫合の矢縫部内板のみに弱度の融合がみられる。この部分の癒着は20才以前にもわずかにあらわれるという。 体幹、四肢骨として遺存する骨は、左右肩甲骨の関節窩の部分、上腕骨に頭の一部（左右不明）、左上腕骨下端部（鳥啄窩、吋頭窩を残す）、右大腿骨骨体の上平（長さ約14㎝）、下半（長さ約11㎝）の部で、大腿骨稜、臀筋粗面の発達は比較的よい。その他、脛骨、腓骨の骨体の細片を含め、各長骨の破片が残る。これらの各骨は全体的に形状はやゝ頑丈な感をなすが、すべてが同一個体のものとは断じ難い。また短骨や華奢な部分の骨を除いて、ほぼ全身骨格を揃えているものと思われる。

歯は後記の歯種が遺存し、すべてが頭骨より離脱した状態で出土したが、個体別の判定は難かしい。全歯種において、歯頸線又は歯根3分の1程度の部分で歯根を消失している。これは風化作用による破壊もみられるが、歯の成長期における歯根形成途次のものとみられる。また乳旧歯、第3大旧歯（いわゆる智歯）も含まれているが、これらが同一個体内においての歯の交換をしめすものであるかは速断できない。以上これらの諸形質から、本人骨群の性別吋代的特質等は明確に同定できないが、若年期、小児期の人骨が3体以上含まれているものと推側される。

第1歯群

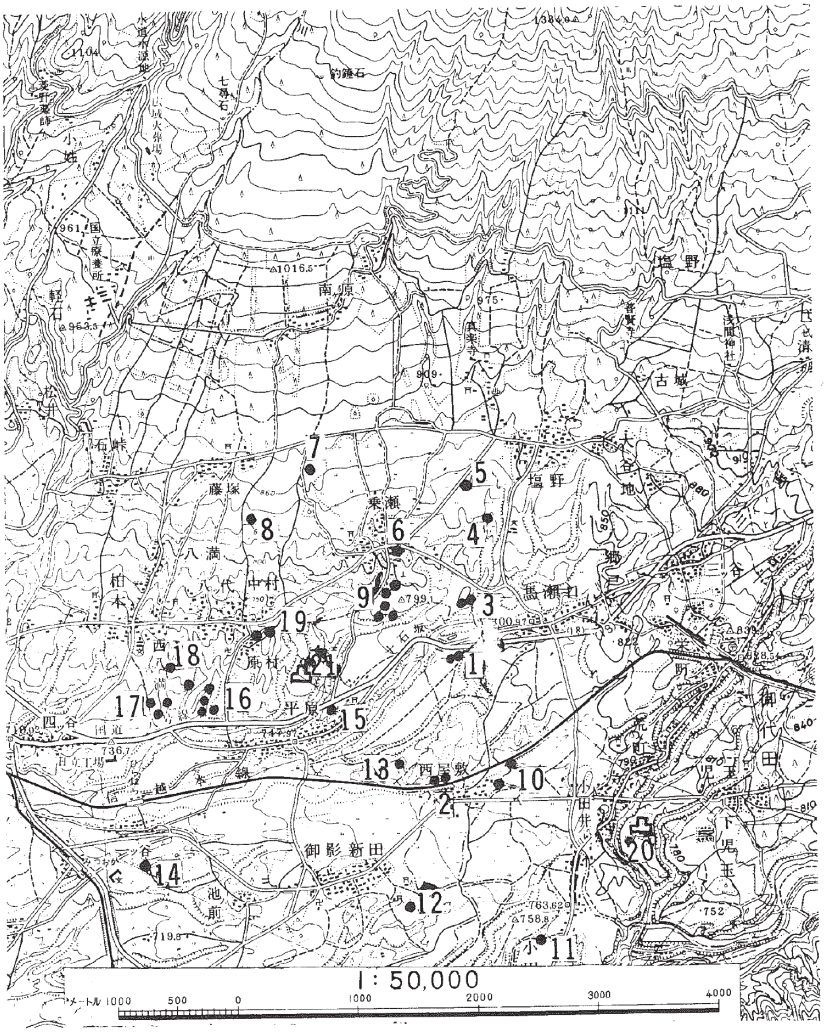
上膈右第2小旧歯、第1大旧歯、下膈右第1、2小旧歯、第1、2大旧歯、左中切歯、側切歯、第1、2大旧歯。

第2歯群　上膈左第1、2大旧歯、下膈右第1、2大旧歯、左第1大旧歯。

第1群に比べて、第2群は大きさがやゝ優る。※：各咬頭にわずかに歴耗痕がある。その他、上膈右第2大旧歯、下膈右第1、（2本）、3大旧歯、下膈左第1大旧歯、下膈左乳旧歯。（西沢寿晃）

人骨以外に混入していた骨は次のとおりである。

ウマ（第3頸椎）、キツネ（第3頸椎）（四肢骨の片）、トリ、うち獣骨2片が火熱をうけている。



第9図　北佐久郡川東地方の古墳群分布図(1：50000)

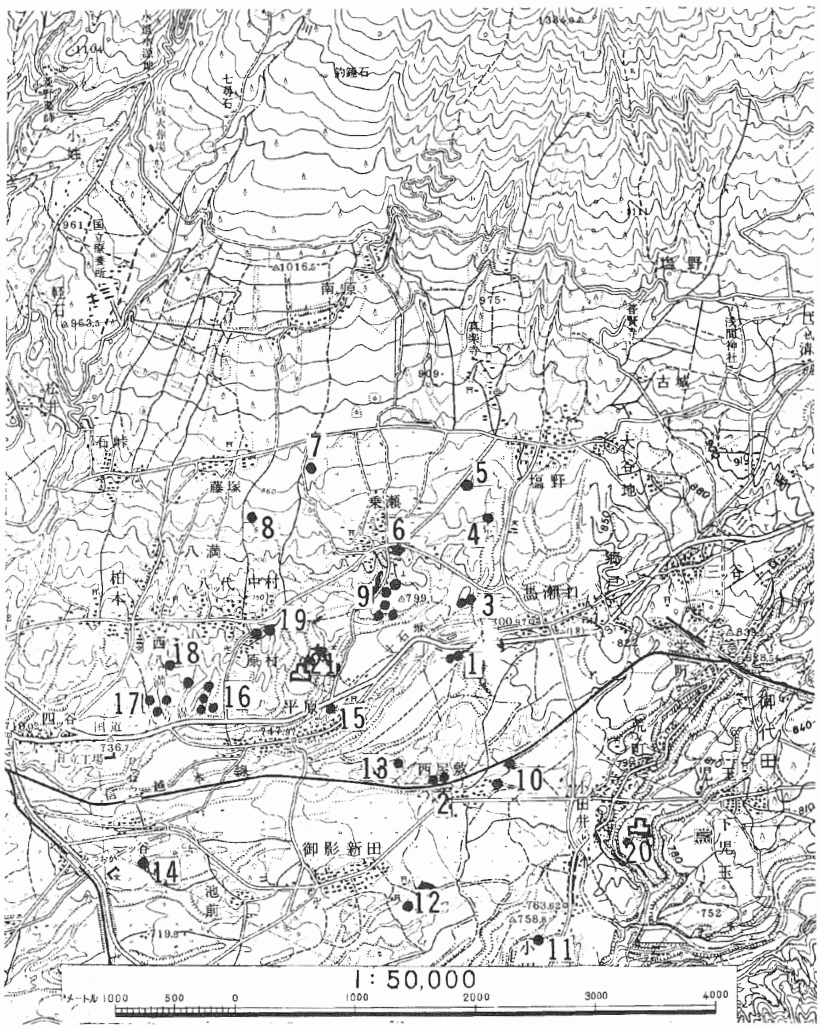
鉄鏃が11点、硬玉製の丸玉が3箇、ガラス製の小玉が9箇、金環1箇が発見された。

これらの副葬品と、別記のこの古墳の調査報告書とによって、この下原古墳について考えてみよう。

先づこの古墳は直径約13メートルの墳丘を持ち、この墳丘内に奥行5.65メートル、巾 3.6メートルの玄室と、巾 2.1メートル、長さ3.38メートルの両袖式の羨道とを持っている。墳丘は土砂が流亡したり、耕作で削られたりしてやつれているが、築造当時は多分この地方では中ぐらいの規模で、一番数が多く最も普通なものだったのであろう。

この古墳は後世盗掘にあっているので、当初はどのような品々が副葬されていたかが明らかでないのは残念であるが、今回の出土品と、かってこの附近にあった古墳のうちから出たものを見たことがあるという人の記憶とを併せて考えてみよう。

先づ切羽である。これは刀の鍔の両側につけて、、鍔と中茎と柄とが密着してガタつかないようにするもので、これぐらいの大きさの切羽があるということは、短かければ45～46センチから長け



第9図　北佐久郡川東地方の古墳群分布図(1：50000)

鉄鏃が11点、硬玉製の丸玉が3箇、ガラス製の小玉が9箇、金環1箇が発見された。

これらの副葬品と、別記のこの古墳の調査報告書とによって、この下原古墳について考えてみよう。

先づこの古墳は直径約13メートルの墳丘を持ち、この墳丘内に奥行5.65メートル、巾 3.6メートルの玄室と、巾 2.1メートル、長さ3.38メートルの両袖式の羨道とを持っている。墳丘は土砂が流亡したり、耕作で削られたりしてやつれているが、築造当時は多分この地方では中ぐらいの規模で、一番数が多く最も普通なものだったのであろう。

この古墳は後世盗掘にあっているので、当初はどのような品々が副葬されていたかが明らかでないのは残念であるが、今回の出土品と、かってこの附近にあった古墳のうちから出たものを見たことがあるという人の記憶とを併せて考えてみよう。

先づ切羽である。これは刀の鍔の両側につけて、、鍔と中茎と柄とが密着してガタつかないようにするもので、これぐらいの大きさの切羽があるということは、短かければ45～46センチから長け

れば75～76センチぐらいまでの直刀があったと見てもよいであろう。

鉄鏃は腐蝕していて明らかではないが、その形から見て尖根式のものである。

これらは明らかなものはそれぞれ１箇体分ずつしか発見されなかったが、他の出土例から推測すると、副葬当時にはもっと数が多かったのではあるまいか。

次には丸玉と小玉である。これは現代のネックレス、即ち首飾りであるから、紐で連ねる場合、１種類のものだけで連ねるのではなく、このほかに曲玉や管玉や切子玉等を交えて連ねるのが例なので、そのような品がもしこの古墳にも副葬されていたとしても、目につきやすく且つ水晶やめのうや硬玉などの貴石で作られた目ぼしいものは、恐らく盗掘されてしまって、小さくて目につきにくかった丸玉３箇と９箇の小玉だけが砂にまみれて難を免れたのではあるまいか。

尚附近の老人の話に、かってこの辺には古墳が５基あって、それが国道18号線の開通にあたってとり崩された際、そのうちの１基から出たもののうちにピカピカと光るものがあったというのである。

この話もまた他の例から推測すると、その光るものというのは、或は馬具のうちの何かだったのではあるまいか。馬具のなかでは杏葉とか胸がいや尻がいの辻金物等には金鍍金をしたものがある場合が多いのである。

盗掘され残りのわずかの品だけなので、詳細で的確なことがわからないのは残念であるが、以上のことによってこの下原古墳が築造されたのは、古墳時代も後期で、そこに葬られた主は、この山麓地帯に土着していた多くの豪族たちのうちで、最も数の多い中位のクラスに属する人だったのではあるまいか。

下原古墳群はこのような階層の人たちの葬られた墳墓群なのであろう。

(3)浅間山麓の歴史時代の黎明

これまで述べてきたことは、浅間山麓地域に遺存する古墳時代の遺跡と遺物とによる考古学的な考察であるが、ここではこれを古代日本史の推移の中で考えてみよう。

いわゆる佐久の歴史時代は大和朝廷との接触から始まると見てもよいであろう。

記録に残されたもので先づその最初は、日本武尊の東征談である。これは現在の皇室を中心として成立した大和政権が、その範囲を東方に拡張していった際の、歴史上の事実を背景にしてつくられた説話なのである。

即ち古墳時代でいえばその中期にあたる４～５世紀ごろに、大和朝廷からは何回にもわたって、幾人もの征東将軍が派遣された。彼等はその征路の間にいろいろな苦心を重ねて、使命を果して帰ったのであるが、その将軍たちの箇々の苦心談が語り部たちによって語りつがれている間に、日本武尊という皇室出身の１人の悲劇的な英雄を主人公とする一連の説話として成長していった。

これが後世国家の修史事業を行うにあたって、古事記や日本書紀に記録されたのであろう。

われわれの浅間山麓の歴史においては、この説話の主人公がたとえ誰であったにしても、文献上では、中央との係り合いのあったものの初めなのである。

次に更に具体的なことでは、別掲の年表で察しられるように、続日本紀等にあらわれている朝鮮からの帰化人たちの東国移民である。

四世紀の後葉から五世紀の初頭にかけて、大和朝廷は西方にも大いにその勢力を拡張したのである。その目指すところは、南朝鮮における鉄資源を確保したいというのがぬらいであったともいわれる。

このために日本即ち倭軍は朝鮮にも出兵して、百済や新羅をくだし、高句麗とも戦ったということは、高句麗にある広開土王の碑の存在によっても明らかである。

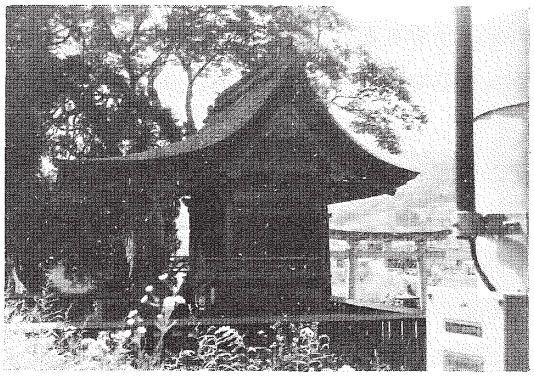
しかしその後の日鮮関係は、一進一退して複雑な推移をたどった後、天智天皇の2年(663) 白村江の戦において、唐の水軍に破れてから、日本は朝鮮問題からは手をひいている。この間において、半島からは多数の人が逃亡・亡命・移住といった各種の形で来日している。日本ではこれらの人たちを一応快くうけ容れて、産業や文化面の向上の資としているが、後にはこれを東国に移しているのである。そしてそれらのうちの一部のものが、この浅間山麓へも入植していると考えられるのである。

これらの人達は、あるいは近畿地方から直接この地へ来たものもあったろうし、またあるいは(1)で述べたように、一旦上州に入植してそこで繁栄した後、更に当時は後進地帯であったこの浅間山麓の地域に再入植したものもあったのであろう。

これらは群馬県の吉井町にある多胡の碑と、同名の多胡神社や多胡という地字名が西小諸地籍にあることや、浅科村の八幡には、高麗との関係を思わせる高良社があること、及びこの地方の古墳の築造法が上州のものと全く似ている“はにわ”が出土していることなどからも考えられるのである。(第10図・第11図)

こうしてこの地方に入植した帰化人たちは、それまではこの地方には無かった馬の飼育という新しい産業に従事して繁栄し、次第に土着の豪族になっていったのであろうと思われる。

このような人たちの墳墓が、今回調査の対象となった古墳なのではあるまいか。



第10図　高　良　社

第11図　加増出土“はにわ”

(二) 浅間山麓の古墳と牧場

(1)浅間山麓の牧場

浅間山の南麓には、東から長倉の牧・塩野の牧・菱野の牧・新治の牧という牧場が設けられている。このうち長倉の牧・塩野牧・新治の牧の三牧は延喜式に記載されている官牧で、菱野の牧は東鑑に貢末済の庄々の中に名があげられている牧場である。

このほかに千曲川と鹿曲川で囲まれている御牧ケ原の台地には、有名な望月の牧がある。

これらは何れも奈良時代から平安時代・鎌倉時代へかけて、勅旨牧即ち官設の牧場で、普通にはこれを御牧と呼んでいる。

浅間山の南麓にこのように多くの牧場が設けられたのは、牧場設置に対する立地条件がよかったからであろう。その条件としては、この地域の自然の気象即ち気温や降水量とか、山野の地形や水とか、又はこれによって生育する植物の状態などが考えられるが、これらが馬を飼うのに至極適していたからであろう。

然しそのような好条件も、これを認める人があってこそ世に出るわけで、これを見出したのが、上来述べてきたこの山麓へ入植してきた帰化人たちだったのではあるまいか。

彼等はここへ入植すると、この地方のこのような好条件に目をつけて、折から当時の社会で軍用としても交通上からも、非常に要求していた馬の飼育を、自己経営ではじめたのであろう。

このような牧場即ち私牧が各地で行われているのを見て、ここに国家的な要求として、国家の経営する牧場即ち官牧を設置することとし、このような私牧は官牧の中に吸収して、その私牧を経営していた人たちは、官牧の役人とか飼育係とかいったそれぞれの役職に任用するというような処置が行われて、さきのような幾つもの官牧が設置されたのではあるまいか。

このように考えてみると、この地方に多くの官牧が設けられた理由にもわかるような気がするがそのような経過をたどってこの御代田町の地籍に設置されたのが、延喜式内の塩野の牧だったのであろう。

(2)古墳と牧場

さて最後に、これまで別々に述べてきたこの地域の古墳と牧場との関係について、重複のきらいはあってもまとめのためにもう一度考えてみよう。

馬瀬口の下原古墳群は前にも述べたように、その墳丘の大きさや石室の造り方や、羨道のつき方などという構造上から見て、この地域では最も普通で最も数の多いものである。

また今回の清掃で発見された副葬品が、玉類等の服飾品のほかに、刀の切羽や鉄鏃といった武器類と、乗馬用の馬具があったらしいということで、既にこの地方でも馬が飼われており、しかもその馬具には金鍍金をしたものを用いたらしいといったことを参考にすると、この古墳に葬られた人は、飾り馬のようなものに乗って威儀を誇った、かなりの勢力と経済力とを持っていた人であったろうということが考えられる。

これらの点から見るとこの古墳の築造年代は、前にも述べたように古墳時代の後期に属すると考えるべきであろう。

ここで再び別掲の年表を参照すると、6～7世紀ごろには、朝鮮半島内における高句麗・新羅・百済等三国間の事情と、これらの三国と日本との国際関係もあって、彼の地から日本への人口の流入が相当多かったのである。そして日本では、これらの三国からの人たちを差別せずに、比較的スムーズにうけ容れて、経済や文化の向上に役立たせていたが、七世紀の後半から八世紀になって、これらの人たちを東国に移して、その開拓にあたらせたのである。

これがこの地方でいえば、あたかも上来述べてきた古墳時代の後期にあたるわけなのである。しかもまたこの地方の古墳が、その築造法や副葬品や“はにわ”や、更には多胡神社といった信仰関係の点からも、上州との関係が深いのを見ると、この地域へは朝鮮からの帰化人が相当来ていると考えてもよいように思う。

そしてもしこれらの古墳の主が、それらの帰化人と関係があった人たちのものであったとすれば、これらの古墳の主はまた、この地域の牧場の開拓にも関係があった人たちだったと考えてもよいのであろう。

上代における日鮮関係年表

三〇一～三五〇		このころから大和政権発展
三六九		このころ任那日本府成立
三九一		倭、朝鮮出兵、百済、新羅をくだし、高句麗と戦う。(高句麗、広開土王碑銘)
四〇〇		倭兵、新羅に進入（仝）
四〇四		倭兵、帯方郡侵略……敗退（仝）
四〇七		日本の朝鮮根據地、高句麗に征服される。
四二一		倭王、讃、栄から叙爵（つづいて珍四三）清（四四三）興（四六三）叙爵（栄書倭国伝）
四七八		倭王武、上表（宋書倭国伝）
五二七	継体二一	筑紫、盤井の反（紀・記）
五三八	宣化三（欽明七）	百済聖明王、仏像、経論を献じる（書記では五五二）
五四〇	欽明元（欽明九）	大伴金村、任那四県、割譲問題で引退（紀）
五六二	欽明二三	新羅・任那の官家をほろぼす。任那の日本府ほろびる（紀）
五七七	敏達六	百済・経論と師・禅師・造仏工・造寺工を贈る（紀）
五八七	用明二	蘇我馬子・物部守屋をほろぼす（紀）
五九三	推古元	聖徳太子摂政、四天王寺をつくる（紀）
六〇〇	〃八	倭国・任那を救い、新羅軍を破る（紀）倭王遣隋使派遣（隋書倭国伝）
六〇四	〃一二	聖徳太子憲法十七条発布
六〇七	〃一五	小野妹子遣隋（六〇八再び）、法隆寺建立
六一〇	〃二八	聖徳太子、天皇記、国記などを撰す。
六三〇	叙明二	犬上御田鍬を唐に派遣（遣唐使の初まり）
六四三	皇極二	蘇我入鹿、山背大兄王を亡す。百済王族内乱のため亡命
六四五	大化元	中大兄皇子等蘇我入鹿を誅す。
六四六	〃二	大化改新
六五八	斉明四	阿部比羅夫、粛慎を討伐。
六六〇	〃六	百済滅亡
六六一	〃七	百済救援の師を発す。
六六三	天智二	日本の水軍、唐の水軍と白村江に戦って敗らる（百済救援失敗）百済人多く帰化
六六四	〃三	対馬、筑紫に防人・烽を置き、水城を造る。
六六六	〃五	百済男女二千余人を以て東国に居らむ。
六六七	〃六	近江に遷都、讃岐・対馬に城を築く。
六六八	〃七	高句麗滅亡
六七〇	〃九	庚午年籍をつくる。
六七三	弘文	壬申の乱起る。
六八三	天武一二	諸国の境界を定める。
六八四	〃一三	百済の僧尼及び俗人男女二十三人を武蔵国に移す。
六八七	朱鳥元	新羅の僧尼及び男女二十二人を武蔵国に移す。
六九〇	〃四	新羅人韓奈末許満等十二人を武蔵国に移す。
七〇〇	文武四	諸国に令して牛・馬を牧地に放たしむ。
七〇八	和銅元	武蔵国から自然銅献上……改元
七一二	〃五	犬安万侶、古事記撰上。
七一三	〃六	諸国の那郷名を改正
七一六	霊亀二	諸国の高句麗人一七九九人を集め、武蔵国に高麗郡を置く。
七二〇	養老四	日本紀三十巻、系図一巻撰上。
七四九	天平二一	奈良大仏完成。
七五八	天平宝字二	帰化新羅僧三十二人、尼二人、男女二十一人を武蔵国に居らめ、新羅郡を置
七六〇	〃四	新羅人三十一人を武蔵国に移す。
七八四	延暦三	国司の開墾禁止
七九二	〃一一	兵士をやめ健児をおく。
七九四	〃一三	平安遷都
七九八	〃一七	坂上田村麻呂、清水寺建立
八一四	弘仁五	新羅人加羅布古用ら帰化、美濃国に配置
八一六	〃七	新羅人清石珍ら百八十人帰化、空海高野山に道場をひらく。
八一七	〃八	新羅人、金男昌ら四十三人帰化、新羅人遠山知等百四十四人帰化
八二二	仝一三	新羅人四十人帰化
八二四	長元	新羅人、新旧を論ぜず陸奥の空地に遷すことをきめる。
八九九	昌泰二	相模足柄坂、上野碓氷坂に関を置く。

馬瀬口下原古墳群

御代田町馬瀬口下原古墳群
学術発掘調査報告書

昭和50年10月15日　印刷
昭和50年11月3日　発行

著　者　下原古墳群発掘調査団
代表　与良　清
発行者　御代田町教育委員会
印刷所　㈱佐久印刷所